

人形姫

山本幸久

第一回

1

何百何千という瞳が自分に注がれている。そんなはずはない。ただの気のせいだ。それでも森岡恭平きょうへいは不気味でたまらず、ネクタイを僅わずかに緩めた。額に汗が流れていくのを感じて、背広のポケットからハンカチを取りだして拭ぬぐう。

「暑いよな」

隣で慎次しんじが呟つぶやく。二歳下の弟だ。恭平とおなじくブラックフォーマルだが、生地やデザインからして、弟のほうが高級にちがいないか。倍どころか、下手をしたら一桁ちがう値段かもしれない。

慎次は昔と比べ、格段に体格がよくなった。スポーツ嫌いだっただけが三十歳になって、トレーニングジムに通いだし、その成果が確

実にでているのだ。

恭平はスポーツ万能で、高校の三年間はボート部に所属していた。二年のときはキャプテンを務め、その年にはインターハイで優勝している。その頃に培った筋肉は、いまや脂肪と化してしまい、腹も出っ張りだした。

「ここって換気が悪いから、熱がこもるんだよ。表に比べて五度は高いぜ、きつと」

慎次がなおも小声で言う。彼もまた額に汗を滲ませていた。ここがどこかと言えば鐘撞市内でいちばん大きな寺にある本堂だ。

恭平が五代目社長を務める森岡人形から車で十分と離れておらず、森岡家代々の墓があった。ただしいま、住職がお経をあげているのは森岡家のためではない。ひとのためでさえなかった。目の前に並んだ人形達のためだ。

十月第一日曜、晴天に恵まれた今日、ここでおこなわれているのは人形供養だ。人形の魂を抜き、物へと返す御心抜きごしんの儀式なのだ。さきほどから恭平を見つめているのは、魂が抜けでようとしている人形達だ。この一年のあいだに郵送あるいは持参されてきたもので、二千を優に超えていた。本堂の裏手にある広間に保管しておき、今朝早くに一体ずつ丁寧に本堂へ運んだ。恭平のみならず、鐘撞人形共同組合の有志も手伝い、一時間ほどでおわらせることができた。

桃の節句のお雛様が五割、端午の節句の金太郎や鎧兜よろいかぶとなどが三割ほど、あとはアニメや漫画のキャラクター関係のぬいぐるみ、その他フランス人形やビスクドールもあった。

ちなみに一辺が約五十センチの段ボール箱一箱、あるいは四十五リットル程度の袋一袋につき一口五千円のお布施ふせになる。箱と袋、いずれも何体詰めこんでもいい。もちろん限度はあるが、世の中には限度知らずのひともおり、住職の話だと、郵送されてきた箱を開くと、何体もの人形がぎゅうぎゅう詰めになっていることもあるらしい。

「おふくろや親父んときも、こんなに長かったっけ？」

慎次がふたたび小声で言う。読経どきょうのことにちがいない。

「どうだったかな」

そう言われてみれば、こちらのほうが長く思える。

人形供養は午後一時からはじめたのだが、かれこれ二十分は経っていた。お経をあげる住職のうしろには、五十人ばかり列を乱さず、整然と並んでおり、本堂の外にもそこそこ長い列ができている。人形の持ち主だった方々で、ほとんどがラフな格好である。そんな中に喪服を着たひと達がちらほらいた。鐘撞人形共同組合の面々かみれきだ。還暦過ぎのジイサンばかり、三十代の森岡兄弟がいちばん若いだろう。人形業界ぜんたいがそれだけ高齢化しているのだ。これに加え

て世の中は少子化しているのだから、先細りは否めない。

鐘撞市は江戸時代より、人形の町と言われた。いまもそう名乗ってはいるものの、昭和の最盛期と比べると人形店は五分の一以下まで減っており、今年も数軒、店を畳んでいる。

森岡人形も俺の代までかもな。

そもそも跡取りがない。三十七歳の恭平はバツイチで子どもがおらず、慎次は未婚だ。しかも弟の場合、森岡人形の専務でありながら、日本人形をつくっていない。十年近く前にフィギュア事業部を立ちあげ、見る見るうちに業績をあげていき、いまや会社ぜんたいの収益の七割以上を稼いでいる。なにしろ中国の奥地に工場を構えているほどなのだ。一昨年だいかんやまの春にはフィギュア事業部のみ、東京へ移転した。それも代官山である。五階建てのビルの一階から三階を借りており、従業員数は五十人にもぼった。それでもまだひとが足りないのだと弟は言う。ちなみに鐘撞市にある本社は二十人にも満たない。それもパートのオバサンを含めてだ。

この二、三年、弟は人形供養に参列していない。外回りが多く、代官山のオフィスには週三日いればいいほうで、中国のみならず台湾やベトナム、シンガポールと海外出張も多いため、なかなかつかまえることができなかったのだ。それでも一応、スマートフォンにメールを送っておいたところ、昨夜遅くに出席するとの返信があり、

早朝の人形を運ぶ作業にも参加したのだ。

「兄貴はわかった？」

慎次がまた訊ねてくる。読経が長くて飽きてきたのだろう。

「なにが？」

「親父がつくった人形。いくつかあったんだろ」

正しくは親父が顔を描いた人形だ。日本人形の制作は、頭は頭かしら、髪は髪付師かみつけ、衣裳は着付師、手足は手足師、小道具は小道具師と分業でおこなわれる。親父は頭師で、顔をつくるのが専門だったのである。

「なんとなくはわかった」

嘘だ。つまらぬ見栄を張るものと自分でもあきれてしまう。

「さすが五代目」慎次の言い方は皮肉めいていた。いつものことなので気にならない。「俺は宮沢さんに見せてもらって、はじめて気づいたよ」

じつを言えば恭平もおなじだった。

宮沢は森岡人形の頭師で、最年長の七十五歳のオジイサンである。恭平も頭師だが、まだまだ新米どころかヒヨッコだ。弟のいる反対側を振り返れば、二列うしろに宮沢はよれよれの喪服を着て、突っ立っていた。

ん？

様子がおかしい。宮沢は俯うつむき肩を震うわせていた。どこか具合が悪いのだろうか。

「宮沢さん、どつかで呑のんできたんじゃねえ？」

慎次が吐き捨てるように言う。

「そういや、さつきまでいなかったな。」

朝に人形を本堂に運びおえてから、しばらく姿をくらましていたのだ。そのあいだに近所のファミレスでも一杯、ひっかけてきたのだろう。

「あんな酔っ払いのジイサン、いつまで雇かっておくつもりさ」

弟は宮沢が嫌いなのだ。恭平も苦手だ。昔ながらの職人かたぎ気質で頑固者、なにかと言えば「先代は」「四代目は」「あなたのお父様は」と親父のことを引き合いにだす。それだけならまだしも、加えて酒癖が悪いときている。酒の匂いを漂かわせ、職場に訪れることも珍しくない。もちろんまるで仕事にならず、日がな一日、椅子に座ったままでい軒ひまをかいていた。親父が生いきているうちは、こんなことはなかったはずだ。

要するに俺はナメられているんだ。

だからといって、やめさせることもできない。宮沢の酒癖は昔からだが、さらに悪化したのは奥さんを亡くしたせいだった。宮沢は二階建ての一軒家に一人暮らしである。恭平よりも二、三歳上の娘

さんがいたはずだが、とうの昔にお嫁にいき、盆正月に顔を見せる程度らしい。そんな孤独な老人を追いだすような真似は、恭平にはできなかった。

なによりも腕はいい。とくに女雛めびなの顔は絶品だ。当然、恭平など足元にも及ばず、親父もここまで描けなかつただろう。だがそれも酒が抜けていればだ。問題はその状態が次第に短くなっていることだった。

それに。

「聞いたぜ。宮沢さんが原因で、この春に入社した新人がやめちまつたつて」

「まだやめてはいない」
だがやめるだろう。

新人のうちは基礎を学んでもらおうと、各師の制作現場にだいたい一ヶ月ずつ入ってもらい、最後が頭師だった。ここで宮沢と揉めてしまったのだ。

「どうせまた、宮沢さんがイジメ倒したんだろ」
弟に言われても恭平は口を閉ざしたままだった。凶星だったからだ。

宮沢は自分の技を他人に教える気はさらさらなかつた。筆を握らせないのは序の口で、自分が作業をしているところを見せもしない

のだ。あつちいけと追い払い、おまえのような若造なんぞ見たってわかりやしねえと罵る始末だった。

この数年、職人枠で新卒を採用してきたものの、全員、宮沢のせいでやめていった。長くて二年、短いと二日だ。

森岡人形には宮沢と恭平の他にあとひとり、頭師がいる。宮沢とおなじく、恭平の親父の弟子だった峰三郎だ。六十五歳のベテランの彼に、新人の面倒は見てもらっているのだが、そこへ宮沢が割りこんで邪魔をすることもままあった。そのとき峰は宮沢になにも言えずにいた。どうしてなのか、恭平が訊ねたところだ。

十歳も上の兄弟子に意見するなんて、できやしませんよ。勘弁してください。

涙目でそう訴えられてしまった。

「要するにあのジイサン、他人に仕事を教えたら、てめえの職が奪われちまうと思っっているんだよ。老害もイイところさ」

これまた弟の言う通りである。

今年の新人は辛抱強く、宮沢になにを言われてもニコニコ笑って聞き流すことができた。恭平はできるかぎり新人を庇い、峰も宮沢の邪魔をじょうずに回避した。ところが四日前、宮沢はとんでもないことをしでかした。その日、朝から酒の匂いを漂わせていた彼は、新人に会うなり、聞くに堪えない下品な言葉を吐いたうえ、その両

胸を手で鷲掴みにして、揉んだのである。新人は二十三歳の女性だったのだ。彼女は悲鳴をあげ、そのまま職場を飛びだしてしまった。以来、今日まで音信不通だった。

パワハラにセクハラのダブルパンチだもんな。こんな会社、やめないほうがどうかしている。

住職が鐘を鳴らし、読経をおえた。つづけて参列者の焼香がはじまる。

「うぐぐ、うぐ、うぐぐ」背後で呻く声が出た。ふたたび振り返れば、やはり宮沢だった。右手の甲で頬を拭っている。「ひでえじゃねえかよお。お、俺達が丹誠こめてつくった人形を置く場所がない、邪魔だつて捨てちまうなんてあんまりだあ。人形が可哀想だとは思わねえのかよお。おまえら、それでも人間かあつ」

そう叫ぶや否や、宮沢は列を外れ、駆けだした。森岡兄弟の脇を抜け、二千体の人形達にむかう。

「ヤバイぜ、兄貴つ」

言われないでもわかっている。恭平と慎次は、ふたりで宮沢のあとを追う。ところが年寄りの酔っ払いなのに、その動きは猿みたいにすばしっこい。

「宮沢さんっ」

恭平が呼んでも宮沢は振りむこうとしない。そんな彼が立ち止ま

った。ただし自らの意志ではないようだ。両手を振り回し、「放せえ、放してくれえ」と叫び声をあげている。

何事かと思ひ、参列者をかき分けて前にでて、恭平は驚いた。宮沢の腰にひとがしがみついていたのである。それもワンピースを着た女のひとだった。

「よくやったぞ、ミズグチさん」慎次が言った。どうやら女のひとを知っているらしい。「そのままここに連れてこい」

「無理ですっ。このおじいさん、けっこう力があって、こうしているのがやっつとですっ」

「だったら兄貴、宮沢さんを羽交はがい締めじにして」

「あ、ああ」

おまえがやれよと思わないでもないが、いまはそれどころではない。弟の指図どおり、恭平は宮沢の両脇に腕を通す。

「お、お願いだ、よ、四代目の、せめて四代目の人形だけでも」

宮沢はなおも叫びつづけた。酒臭くてたまらない。吐く息だけでなく、全身から滲みでる汗からも臭いを発しているのだ。いったいファミレスでどれだけ呑んできたのか。

「兄貴、だいじょうぶか」「ああ」

「ミズグチさん、放していいぞ」「はいっ」

女のひとが離れたあと、恭平は宮沢をうしろへ引きずっていくこ

とにした。少なくとも本堂からださねば、と思っていたところ、宮沢が駄々っ子のごとく暴れだした。

「やめてください、宮沢さんっ」

「うっせええ、おまえに人形のなにがわかるっていうんだ、俺はおまえを五代目とは認めねえからな」

やれやれ。

恭平はうんざりした。これまで幾度となく言われてきた台詞だ。酔っ払ったときは必ず口にするのだ。そして酔いが醒めた翌日には詫びにくる。酔った勢いで口が過ぎました、もちろん本心ではありません、二度と酒は呑みません、どうぞお許してくださいと恭平に許しを乞う。明日もきつと、詫びにくるにちがいない。いや、イインですよ、どうぞ気になさらずにと、慰めるように言っつてやらねばならない。

「いいからいきましょ。ね？」

宥めながら、さらにうしろへ下がる。するとどうした拍子か、宮沢の両足が宙に浮き、自転車を漕いでいるみたいにバタつかせる。

「いい加減に」してくださいと恭平の言葉はつづかなかった。

「きゃっ」

ミゾグチが小さく悲鳴をあげる。宮沢の右足に左肩を蹴飛ばされ、背後にあった焼香台に背中から倒れていったのだ。そのはずみで焼

香が床に落ち、がしゃんと音がしたかと思うと、香炉こうろの灰があたり
に舞った。

なんてこった。

恭平はミズグチを助けねばと、羽交い締めにしていた腕を緩めた。
すると待つてましたとばかりに宮沢がするりと抜け、本堂をでてい
ってしまった。

「本日はお忙しい中、お集りいただき、誠にありがとうございます。
思わぬハプニングがありましたか」

恭平は一度言葉を切る。少しは笑いが起こると思っただからだ。思
わぬハプニングとは宮沢のことである。しかし会場のだれしもがグ
ラスを構えたまま、恭平を見ているだけで、くすりととも笑わなかつ
た。スベったどころではない。マズい。

「た、大変申し訳なく思っております」ひとまず詫びるしかなかつ
た。「それでも皆様方が協力してくださったおかげで、無事に人形供
養をおわらせることができました。心から感謝しております。ささ
やかながら、食事をご用意させていただきました。どうぞゆつくり
お寛くわんぎください。それではええっと、人形達を偲しのびまして、献杯けんぱい」

五十人ばかりが手にしたグラスを軽くあげ、口に持っていく。恭
平もノンアルコールのビールを一口呑んだ。なんであれ肩の荷が下

りた。

いまはじまったのは、今日の慰労会である。幹事は恭平、そして場所は森岡人形本社内の一室だ。お寺にいちばん近い会社という理由で、父の代からおこなわれていた。一階のこの部屋は、年末から四月末まで出荷する雛人形や五月人形の置き場所として使っており、まずまず広く、五十人程度の立食パーティーにはちょうどよかった。しかし献杯を済ませたあと、出席者の半数近くが壁際に並べたパイプ椅子に座りこんでしまった。鐘撞人形共同組合は年寄りだらけなので仕方がない。

ただし今年は若いひとが十人いた。若いどころか、あどけない子までいる。興味があればどうぞと人形供養の開催場所と日時を、慎次がフィギュア事業部の従業員みんなにメールで通達したところ、訪れたのがこの十人だったのだ。正社員に契約社員、派遣社員に学生アルバイトの混合チームで男女はちょうど半々である。宮沢を捕まえた溝口はそのうちのひとりだった。美大の大学院生で、来年の春に卒業予定らしい。

人形供養は夕方の四時におえた。本堂の人形二千体は新品の段ボール箱に詰めこみ、五時過ぎには不用品回収業者から訪れたトラックへと運んだ。この作業をフィギュア事業部のメンバーの十人が自ら申しでて手伝ってくれたのだ。

そして彼ら彼女らはこの慰労会に誘ったのは恭平である。ひさしぶりに自分より若い人間と接して、少し舞いあがっていたのかもしれない。だがいまになって、余計なことを言ってしまったと気の毒に思えてきた。喪服のジイサン達に囲まれて、フィギュア事業部の十人は角のほうに集まり、居心地悪そうにしている。

慎次がいけないのもマズい。会がはじまる直前に、ちよつと野暮用ができちまつてと、帰ってしまったのだ。ともかく恭平はフィギュア事業部の十人のもとへいこうと、足をそちらへ進めようとしたところだ。

「五代目」

こうだ さききり
幸田佐吉が声をかけてきた。

森岡人形の経理部長だ。四十年以上ものあいだ、経理一筋の彼は、五代目のヘッポコ社長よりも会社を知り尽くし、アル中寸前の宮沢よりも会社にとってはなくてはならない人物だと言っている。組合や取引先のあいだでは、森岡人形の大番頭と呼ぶひともいた。

「組合の皆様方に挨拶を」

「ああ」

そうだった。

いまから鐘撞人形共同組合のジイサンひとりひとりに、今日の礼を言っておらねばならなかった。それもエライひと順だから、面倒

なことこのうえない。順番を間違えると、あとでブツクサ文句を言うひとがいるのだ。恭平はいまだにこの順番がじゅうぶん把握しきれず、こうした席では幸田に付き添ってもらうのが常だった。なにしろ彼は組合のどの会社がいっ創立し、いまの社長は何代目か、そしていまはどういう経営状態であるかまで、熟知しているのだ。

それにしても慰労会の幹事のみならず、人形供養をおこなうにあたって、あれこれ手配したのは恭平である。礼を言われたいのは俺のほうだよと啖呵たんかのひとつでも切れたら、どれほどスッキリするだろう。むろんそんな真似ができるはずがない。

こんなはずじゃなかったのにな。

作り笑いを浮かべ、ただひたすらペコペコ頭を下げて回りながら、

恭平はぼんやり思う。

どこでどう間違えたんだか。

地元の高校を卒業したあと、恭平は東京の大学に進んだ。東京といっても二十三区ではない。西のハズレで山を切り開いてつくったところだ。東京の隣の県で、北のハズレにある鐘撞市から通うとなると、優に片道三時間はかかるため、東京の西のハズレで一人暮らしをすることになった。

恭平が大学に通いはじめてしばらく経つと、実家では弟の慎次が

森岡人形で働くようになった。というのも二歳下の彼は中学の頃から保健室登校で、恭平とおなじ高校に進学した方がいいが、一年生のなかばには不登校になってしまい、自分の部屋に引きこもり、パソコンにむかう日々だった。結局、二年生になる前に高校を中退、父に命じられ、人形づくりの修業をはじめたのである。

慎次のことだから、嫌がるんじゃないかって心配したのよ。そして、ハイ、そうしますって、素直に答えてね。つぎの日から会社に通いだしたのよ。お母さん、ビックリしちゃった。

母がうれしそうに電話をしてきたのを、恭平はいまでもよく覚えている。通うといっても本社と自宅はおなじ敷地内にあり、通勤時間は十秒とかからない。そして会社から戻れば、あいかわらず自分の部屋に引きこもっていた。ただし仕事の覚えはよく、父直伝で修業にも励んでいたのよ、両親としては御の字だったにちがいない。

やがて恭平は大学三年になり、就職活動を考えねばならない時期が訪れた。そこで夏休みに帰省した際、東京の会社に就職をしていか、お伺い^{うかが}をたてたところだ。

好きにしまわん。

親父は素っ気なく言った。なぜそんなことを訊く？ という顔まですてていた。こんな将来のない会社を任されるなんてゴメンだと思っていたのはたしかだ。しかし多少は跡継ぎの話がでる覚悟はして

いたし、言い訳も準備してあったので、恭平は拍子抜けだった。そして親父はつづけてこう言った。

会社は慎次に継いでもらう。それでいいよな。

悪いとは言えない。それどころかラッキーというべきなのに、恭平はショックを受けている自分に気づいた。

そしてまた、ひさしぶりに会った慎次は、妙に大人びて見えた。親父と会社の話をするときなど尚更だった。そして自分が幼く、二歳下の弟よりヒドク遅れをとっているようにも思えたものである。

その年の夏は実家からさっさと引き上げ、東京の西のハズレに戻って、居酒屋とコンビニのアルバイトを掛け持ちし、休むことなく働いた。そうすれば弟に追いつけるように思えたのだ。

大学三年の秋から本格的に就職活動をはじめたものの、ままならなかった。マスコミが第一志望だったが、箸にも棒にもかからず、あらゆる業種を手当たり次第に百社以上受けた末、プラスチックの成形加工を製造・仕入・販売している会社からどうにか内定をもらったのは、四年の冬だった。リクルートスーツを一年以上着ていたことになる。

ただし会社は東京ではなく、神奈川県おだわらの小田原市だった。そのため東京の西のハズレから会社近くの独身寮へと引っ越さなければならなかった。ワンルームマンションではあるものの、高台にあって

見晴らしがよく、海まで歩いて十分足らずと、そう悪いところではなかった。

配属された部署は営業だが、長年のお得意様のご機嫌をとっておきさえすれば、それでよかった。ほぼ毎日、接待に明け暮れていたほどだ。当時はまだボート部だった名残りで筋肉もあり、スポーツ万能だったので、土日ともなれば接待ゴルフに接待テニス、接待サーフィン、接待草野球と引つ張りダコだった。大学時代よりも遊んでいたように思う。

ときにはお得意様を熱海^{あたみ}までお連れして、一泊二日で芸者をあててのどんちゃん騒ぎをすることもあった。大学時代の友人にその話をする、二十一世紀にもなつて、そんな昭和の香り漂う接待営業があるはずがないと疑われたものだった。

結婚したのは入社して四年目だった。相手は熱海の芸者である。お得意様を接待している席で、割り箸の紙に書いた携帯電話の番号を、彼女から渡されたのだ。この話も大学時代の友人には、嘘もたがいにしろと言われ、他のだれに話しても信じてもらえなかった。結婚するにあたっては、両親ともに殊^{こと}の外^{ほか}、よろこんでくれた。ここでようやく恭平は、弟に遅れを取ったぶんを、取り戻したように思えた。弟はどう思っていたかはわからない。こちらから訊きもしなかった。

ちようどおなじ頃、弟は社内にフィギュア事業部を立ちあげようとしていた。それこそ婚約者を連れて、実家に帰ったときに親父から聞いたのである。

正直、俺にはよくわからんが、おなじ人形だしな。慎次には慎次の考えがあるらしいし、ダメ元でやらせているんだ。

そう言いながらも、親父はどこかうれしそうで、恭平は不愉快とまでいかずとも、おもしろくなかった。なんにせよ実家の会社に口出しをする権利は恭平にはないので、黙っていた。

独身寮をでて、小田原市内に2DKのマンションを借りて、新生活がはじまった。これまでの人生で、この時期がいちばん幸せな時期である。これが永遠につづけばと思っていたが、生憎あいにくそうはいかなかった。永遠どころか一年も保たもなかった。離婚したのだ。原因は妻の浮気だった。

その日は接待テニスの予定が、お得意様の都合でキャンセルになってしまった。そこで妻が好きなケーキを買い求め、だいぶ早めに帰宅したところだ。寝室から喘あえぎ声が聞こえた。まさかと思い、ドアを開くと、ダブルベッドの上で、見知らぬ男に妻が跨またがっていた。

このときの光景を、恭平はいまでも夢に見る。だがそのあとの記憶はさだかではない。だれかが叫び声をあげたのはたしかだが、それが自分だったか、妻だったかがよく思いだせないのだ。見知らぬ

男に、落ち着いてください、旦那さんと宥められたようにも思うが、どうだったろう。

気づいたら、2DKのマンションにひとりぼっちだった。妻がでていってしまったのである。どこへいったかわからない。正式に離婚したのはひと月後だった。ただし、しばらく実家には黙っていようと思った。恥ずかしくて、みっともないとも思ったからだ。

ところがそうもいかなかった。

離婚して三ヶ月もしないうちに、父が突然、亡くなった。職場で倒れ、救急車で病院に着いたときには、息を引き取っていたのだという。付き添いでいった慎次が、病院から電話をしてきたのだ。平日の昼間で、恭平は会社にいた。

兄貴はいつ、こっちにこられる？

上司に事情を説明して、すぐにでもむかう。

だったらウチにいつてくれないか。俺はまだ、あれこれ手つづきがあつて、ここをでられそうになくてね。職場のひと達に見てもらっているけど、おふくろが心配だからさ。

慎次は冷静な口ぶりで、落ち着き払っており、弟であることは間違いないのだが、自分の上司やお得意様のおエライさんと話しているようだった。

奥さんもくる？

慎次に訊かれ、恭平は言葉を詰まらせた。仕方がないので、離婚したことを告げた。

そうだったんだ。おふくろにはあとで言ったほうがいいかもね。

とりあえず俺は言わないでおくよ。

ああ。

それとさ、兄貴。

なんだ。

いきなりでなんだけど、できれば兄貴が跡を継いでくんないかな。

「さっきのおじいさん、だいじょうぶでしようか」

恭平はいささか面食らった。組合の面々にひととおり挨拶を済ませたあとだ。ノンアルコールのビールで、喉を潤うるしていたところに、溝口がいきなり話しかけてきたのである。さっきのおじいさんとは宮沢のことだろう。本堂を飛びだしていったまま、戻ってこなかった。一人暮らしの一軒家に帰ったか、それともどこかへ呑み直しにいったのかもしれない。

「うん、まあ」

「よかった」

溝口はほっと胸を撫で下ろしている。自分を蹴飛ばしたヤツのこ
となど、心配することないのにと恭平は思う。

それも、よかっただなんて。

ひとがイイにもほどがある。

「あの方、頭師だそうですね」

「なんで知っているの？」

「森岡さんに聞きました」

フィギュア事業部では慎次は、さん付けで呼ばれているのだ。恭平は羨ましかった。「五代目」だとか「社長」だとか呼ばれるのは、プレッシャー以外のなにものでもない。シンドくてたまらなかった。

「あたし、あのおじいさんがおっしゃっていたこと、なんかわかる気がしました」

なんだ？ 俺を五代目だと認めないことだろうか。

「せっかく丹誠こめてつくった人形を、邪魔だからと捨てられてしまつては、たまりませんよね」

なんだ、そつちか。それはそうか。

「仕方ないよ。それぞれ家の事情っていうのもあるし」

「それはそうですけど」とは言いながら、溝口は不服そうだ。

「きみのお雛様はいま、どこにある？」

「ニューヨークです」

予想外の返答だ。

「どうしてそんな遠くに？」

「あたし七歳上の姉がいるんです。その雛人形は姉と共有というか、姉のために買ったのを、あなたのももあるのよって、両親に言い聞かされたわけで」

姉妹ではよくあることだ。姉妹それぞれに雛人形を買い与えるよ
うな家庭は、よほどの金持ちである。

「その姉がフェイスブックで知りあったアメリカ人と結婚して、ニ
ューヨークに暮らしてしましてね。去年の末に生まれた女の子のた
めに、雛祭りをしたいで雛人形を送ってくれと姉が両親に連絡し
てきたんです。だったら新品のを買ってあげればイイじゃないかっ
て、あたしは言ったんですけどね。姉はどうしても自分のじゃなき
や駄目だって言い張って。あたしのももあったのにヒドくありませ
ん？」

「ヒドいな」とひとまず同意をしておいた。

「じつはその雛人形って森岡人形のなんですよ。お内裏様とお雛様、
どちらも品がよくって、素敵な顔で大好きだったんです。だからあ
たし」

「やっただあ、幸田さんったらウケルウウ」

溝口の話にはまだ、つづきがありそうだったが、それを黄色い声
が遮った。

恭平のみならず、会場にいたジイサン達の視線が、そちらにむけ

られる。フィギュア事業部の輪の中に幸田がいた。恭平とふたりで、組合の面々に挨拶をしていたときは神妙な面持ちだったのが、打って変わって朗らかな笑顔を浮かべ、とても楽しそうだ。

ここ最近、幸田は代官山のオフィスにも足繁く通うようになった。本社に顔をださずに、直行することもよくある。むしろん經理の仕事をするためだが、弟の話では若い連中を誘って、代官山界限へ呑みにいくこともあるらしい。これまた羨ましいかぎりだ。

「幸田さん、ウチの部署で、女の子のファンが多いんですよ」

「どうして？」思わず恭平は聞き返してしまう。

「ジェントルマンな雰囲気かもを醸しだしているところが、イイんだと思います。どんなに若い子に対しても、丁寧語ですし」

そうなのか。だからといって、いまから丁寧語に切り替えるわけにもいかない。

「私達のあいだでは、アルフレッドとも呼ばれているんです。言いだしたのはあたしですけど」

「それってバットマンの執事の？」

「よくご存じですね」

「バットマンの映画を何本か見ているんで、偶々覚えていただけだよ」

恭平が見たバットマンではアルフレッドを、マイケル・ケインが

演じていたはずだ。ならば幸田がマイケル・ケインに似ているかというとなんことはないが、その佇まいたたずに共通点はあるように思えた。

待てよ。だとしたら俺はバットマンか。

「飲み物はビールですか」溝口が訊ねてきた。恭平のグラスが空になっっていたのだ。

「いや、ノンアルコールのを呑んでいたんだが」

「おなじものでよろしいですか」

「そうだな」

恭平の返事よりも先に、溝口は近くのテーブルにあったノンアルコールの瓶を右手に持ち、差しだしてきた。

「すまないね」

「とんでもありません」

「幸田さん、スノボができるんですかあ」

フィギュア事業部の輪から、ふたたび声が聞こえてきた。さきほどよりもボリュームが大きくなっているのは、お酒が入っているせいかもしれない。

「五十歳のときにはじめて、毎年冬と春に一度ずつ、湯河原ゆがわらのゲレンデで滑っています」

初耳だ。

「だったら今年の冬、あたし達といきませんか？」

「よろしければぜひ」

女の子の提案に幸田はあっさりノった。フィギュア事業部は大盛りあがりだ。

俺だってスノボくらいできるぞ。

元の会社では接待スノボをしたこともある。でもここ何年もゲレンデにいつていない。最後がいつだったか。

「あっ」

「どうしました？」思わず声をだした恭平に、溝口が訊ねてきた。

「なんでもない」

最後にゲレンデにいったのは別れた妻とだった。同時に男の上に跨がるその姿も脳裏に浮かぶ。ドアのほうにむいていた彼女と目があつた瞬間が鮮明に甦よみがえってくる。自らの気を落ち着かせるため、恭平は何度も大きく深呼吸をする。

「だいじょうぶですか」

溝口が心配げな目でのぞきこんできた。

「気にしないでくれ。ただの持病だ」

大袈裟おおげさではない。実際に恭平は、二ヶ月に一度のペースで病院に通っている。心の病ではあるが、身体にも影響がでていた。妻と別れてからこのかた、男にとっていちばん大切な機能が、役立たずに

なってしまったのだ。薬を飲んで、カウンセリングも受けているのだが、いまのところ快復の兆しはない。これから先もこのままなのかと思うと、ぞっとする。

それにしてもこの子はなんで仲間の輪から外れ、俺に話しかけてきたのだろう。

今更ながら恭平は不思議に思う。恭平は溝口を横目で見た。愛らしいお嬢さんだ。大きな目の下には流行りの涙袋があり、鼻筋が通っていて、ふっくらとした唇はなんとも艶かしい。

「さっきの話のつづきなんです」

どの話か思いだすのに、恭平は少し時間がかかった。

「ニューヨークへ行ってしまった雛人形が大好きだったって話のつづき。」

「あつ、はい。それであたし、いつか日本人形をつくることができたらイイなと思ったんです」

「ほんとに？」

「ほんとです。信じてください」

真顔で言い返されてしまった。そんな奇特なひとが世の中にいるとは、到底思えないが、信じるしかなさそうだ。

「そのためにはデッサンとか造型とかの基礎を学ぶべきだと美大の彫刻学科に入って、彫塑ちようそをやっていたんですが、その傍ら日本人かたわ

形も独学で勉強して、実際に何体かつくってもみたんです。美大を
でてからは日本人形の作家になるつもりだったんですが、なかなか
ウマくいなくて、それで、あの、じつは森岡人形でバイトをしな
いかって友達に誘われて、てっきり日本人形をつくる現場だと勘違
いして、二つ返事で了解したんです。ところがフィギュアの部署だ
ったので、どうしようかと思ったんですが、原型師の手伝いをして
いたら、それはそれで面白くて、でもやはり日本人形をつくりたい
という、初志貫徹をすべきだと思い直しまして」

溝口は次第に声が小さくなり、歯切れも悪くなった。しかも視線
を外し、俯き加減になっていく。頬が赤く染まってもいる。言いた
したくても言えないことがあるらしい。恭平はそれを察し、代わり
に言ってみた。

「きみがつくった人形、見てあげようか」

「い、いいんですか」溝口が顔をあげる。その表情はキラキラと輝
いて見えた。

「いつ持ってこられる？」

「社長さんのご都合にあわせます」

社長にさん付けで呼ばれたのははじめてだ。

「明日の午後はどう？」

「だいじょうぶです」そう言うなり、溝口は恭平の右手を両手で握

りしめた。「よろしくお願いします」

「あ、ああ」

女のひとの肌に触れたのはひさしぶりだ。恭平は少なからず動揺し、危うく左手に持ったグラスの中のノンアルコールビールをこぼしそうになったくらいだ。

下半身がモヤモヤする。しかし男の機能はおとなしいままだった。

〈つづく〉